

書評

トニア・キウソプル (2011)『皇帝か管財人か？ 1453 年以前のビザンティウムにおける権力と政治的イデオロギー』ジュネーヴ

Kiousopoulou, T. (2011) *Emperor or manager: Power and Political Ideology in Byzantium before 1453*, translated by Paul Magdalino, Geneva

石川 知明 ISHIKAWA, Chiaki
茨城県立日立工業高等学校教諭

本書のタイトルは、ビザンツ末期の歴史家ゲオルギオス・スフランツィスの『小年代記』から引用されている¹。ヨアニス 8 世（在位：1425-1448）が推進する教会合同政策について、父帝マヌイル 2 世（在位：1391-1425）がスフランツィスに述べた言葉である。15 世紀のビザンツ国家は、14 世紀中盤以降にパレオロゴス朝内で行われた内戦や、オスマン朝の侵攻による「衰退」という文脈で語られてきた。その終着点としてのコンスタンティノーブル陥落（1453 年）の原因や過程に焦点が当てられてきた²。

本書の著者トニア・キウソプルは、クレタ大学の歴史学・考古学部でビザンツ学教授として奉職した。彼女は衰退の末にビザンツ国家が滅亡したという従来の歴史観を踏襲しなかった。彼女は膨大な史料を駆使して、コンスタンティノーブルの空間、政府の権力構造、アイデンティティに変化が見られたと主張した。その結果、15 世紀のビザンツが領域的な国家から首府コンスタンティノーブルを中心とする都市国家へと変質していたと解釈している。本書は 2007 年にギリシア語で出版され、欧米の学術誌の書評において肯定的評価を得ている。2011 年にポール・マグダリーノ（セント・アンドリュース大学）によって英語への翻訳が行われ、より彼女の説が膾炙することになった。

彼女は近年の研究で、本書での研究結果をもとにアンドロニコス 2 世（在位：1282-1328）の治世に遡って、皇帝、土地貴族、メシ（μέσσοι：中間層）、教会といった各政治勢力間のパワーバランスの変化を論じている（末尾で紹介する）。その嚆矢となった本書を紹介し評することは、意義があると思われる。

1 「だが、今日、我々に難局がつきまとっている時には、我々の帝国には皇帝（ヴァシレフス）は必要ない、寧ろ管財人（イコノモス）なのだ」（スフランツィス 2012：52）。οἰκονόμος は「管理人」が原義であるが、本書における皇帝の位置付けを考慮すると、「管財人」が正鵠を射ていると思われる。

2 ジョナサン・ハリスは皇帝、皇族、官僚、商人などが自らの利害や立場に応じて、陥落時にいかに行動したかを群像劇的筆致で描いた（ハリス 2013：9-283）。

研究史上における本書の立ち位置を示しておく。本書はビザンツ史の泰斗イコノミディスの小著を出発点としている。14世紀中盤にメシと呼ばれる人々が台頭した。彼らは文字通り、土地貴族と民衆の間に位置し、イタリア都市国家との交易により富裕化した。また、オスマン朝の侵攻によって土地を喪失した貴族も貿易事業に従事した。結果、両者の差異はなくなり、新たなビザンツの支配層となったという (Oikonomides 1979: 114-123)。ネジポールも前述のイコノミディスの研究を出発点としている。ネジポールはビザンツ社会を構成した各階層が、コンスタンティノーブル、セサロニキ、モレアスといった地域でラテン人やオスマン朝に対してどのような反応を示したかを分析し、その反応の共通点や差異を明らかにした³。他方でキウソプルは、コンスタンティノーブル政府で主導権を握っていた支配層に焦点を絞っている。

内容を紹介するに先立ち、目次を翻訳して以下に挙げておきたい。

英語翻訳者による端書き

略語について

序論

第1部 空間と人々

1. コンスタンティノーブル：空間と機能の構成
2. コンスタンティノーブルにおける社会集団
 - A. 商人と実業家
 - B. 総主教庁の官僚

第2部 15世紀における政治権力

1. 政治的人員
 - A. 人員
 - B. アルホンの社会的側面
2. 国家と政府
 - A. 爵位と官職
 - B. 財政管理

第3部 政治的实践とイデオロギー

1. 政治システム
 - A. 民衆 (δημος)

3 コンスタンティノーブルやセサロニキの富裕層（アルホンや商人）は、西欧との経済的關係から親西欧的傾向を持っていた。他方で貧困層は、オスマン朝の寛容な宗教政策や財産保証により親オスマンの傾向を示した。モレアスの土地貴族たちは、コンスタンティノーブルから自立傾向にあり、オスマン朝やラテン人の介入を積極的に受容した。他方でモレアスの住民は、不安定な状況から逃れるため、ヴェネツィア支配の地域に逃れることを選んだ (Necipoğlu 2009: 285-289)。

- B. 賞賛演説と葬送演説
 - C. 皇帝
 - D. 統治者の美德
2. 新旧の共同体
- A. 「パトリス（故国あるいは祖国）」の概念
 - B. エリネスの民、正教の民
 - C. 15世紀におけるビザンツ人の政治的アイデンティティ

結語にかえて なぜコンスタンティノーブルは陥落したのか

補遺

参考文献一覧

索引

第1部は2つの章から構成される。第1章は14世紀末から15世紀の首都コンスタンティノーブルの空間的な説明となっている。大宮殿やコンスタンティノーブル競馬場など、かつての市内中心部は荒廃する一方で、政治の中心はブラヘルネ宮殿に、経済の中心はガラタ地区対岸に移っていたと指摘する。第2章は、この時代のコンスタンティノーブルにおいて大きな役割を果たしたアルホン（ἄρχων:有力者, 貴族）と総主教庁の聖職者たちを採り上げる。本書のアルホンとは、ヴェネツィアやジェノヴァとの貿易事業に参入した結果、富裕層となり、官職を得て宮廷入りを果たした人々である。その出自には2つの経路がある。1つ目は、14世紀中盤頃に史料上に現れたメシと呼ばれた人々である。貿易事業に従事した結果、富裕化し、アルホンとなった。2つ目は土地貴族である。彼らはオスマン朝の領土拡大によってバルカン半島の所有地を喪失し、貿易事業に乗り出さざるを得なかった。アルホンはイタリア都市国家との交易に従事していたため、親西欧派であると同時に教会合同派であった。アルホンは皇帝の側近として、官職を授与されただけでなく、イタリアの都市国家との政治経済上のネットワークを利用し、外交使節として対外交渉を担った。首都防衛に優先順位を置いた皇帝やアルホンが教会合同政策を推進したのに対して、総主教庁の聖職者たちはそのような動きに反発した。両者の軋轢の結果、政治的妥協は困難となった。

第2部も2つの章から構成される。第1章では、キウソプルは従来の研究において個別的なプロソポグラフィに留まっていたアルホンの全体像を描いている。皇帝側近を含む高官の名前は史料に残っているものの、より実務的なレベルで業務に従事した人物については、史料に記載されていないことも指摘している。利用しうる史料を用いて、彼女は①官職保持者、②外交使節への参加者、③公会議への参加者（特にフェラーラ・フィレンツェ公会議）に着目する。マヌイル2世（在位:1391-1425）以降、パレオロゴス家は貿易事業で成功した富裕層（例えばノタラス家）と婚姻関係を結び、宮廷への取り込みを図った。アルホンの子弟は皇帝の側近となるべく宮廷に出仕した。彼らは外交使節に随行し、宮廷でのキャリアを形成していった。第2章ではアルホン

と官職の関係が掘り下げられる。ビザンツ国家の領土縮小に伴って、官職も減少の一途を辿った。皇帝は土地貴族出身者と富裕化したメシ出身者の均衡を図るべく、メサゾン（μεσάζων：皇帝補佐官）の調整力を重視した。皇帝はアルホンの忠誠を獲得するため、官職や徴税権の配分を慎重に行い、彼らが政治的、経済的に依存するよう仕向けた⁴。本章で注目すべき点は、史料上存在が示唆されているポリティア（πολιτεία）と呼ばれる集団の重要性を指摘したことであろう。構成員は官職を保持しないコンスタンティノーブルの富裕層から構成され、皇帝政府に対して一定の影響力を保持したという。

第3部ではビザンツ皇帝やビザンツ国家について、同時代の皇帝賞賛演説や葬送演説などの修辞作品や君主鑑を手がかりとして、イデオロギーの変化を取り扱う。従来ビザンツでは、古代ギリシアの哲学やキリスト教的倫理観が、皇帝の美德として称揚されてきた。15世紀にはプラトンの哲人王や、アリストテレス的公共善への配慮がとくに重視されるようになっていた。皇帝達がこうした言説に傾倒したのは、神秘主義に傾倒した教会から距離を置くための政治的意図があったという。世俗的なアルホンたちはこうした言説を支持した。また、15世紀のビザンツ皇帝は、専制君主としてのヴァシレフス（βασιλεύς：皇帝）から、イコノモス（οικονόμος：管財人）に変化していたと論ずる。地上における神の代理人としての専制君主ではなくなっていた。つまり、第2部で言及されたように、皇帝は官職や徴税権の配分でアルホンたちの利害を調整する「管財人」であった。また、国防の手段としての教会合同政策は、ビザンツ社会に深刻な分断をもたらした。アルホン、ポリティア、コンスタンティノーブル総主教庁の聖職者たちに対して、皇帝は政策の正当性を主張しなければならなかった。第3部の後半は、上記の修辞作品で見られるアイデンティティの変化について、パトリス（πατρίς：祖国）とゲノス（γένος：民族）という単語に焦点を当てられる。パトリスは単に「生まれた土地」を意味する言葉であった。ゲノスは貴族が血統上の正統性を示す目的で用いられた。末期のビザンツ国家が直面した支配領域の喪失によって、マヌイル2世やマヌイル・フリソロラスといった知識人にとって、パトリスやゲノスの概念は政治的な意味を帯びるようになった。彼らは古代ギリシア・ローマの文化的伝統、言語、宗教を共有する同質的な人々をゲノスとした。また、ゲノスの発祥地として、領域的に区切られた土地、即ちコンスタンティノーブルやセサロニキがパトリスであるという認識を持つに至った。これに対して、教会に近しかったゲオルギオス・スホラリオスは、ギリシア人を正教のゲノスと考えた。コンスタンティノーブルを自分自身の「生まれた土地」であると同時にゲノス発祥の地とみなした。彼のパトリスやゲノスの概念は、宗教色が濃いものであった。この2つの潮流が角逐するなかで、コンスタンティノーブルは陥落し、パトリス概念は失われた。しかし、教会に

4 キウソプルと同様に15世紀のビザンツを「都市国家」と論じたハリスは、むしろ皇帝とアルホンの利害の不一致を指摘している。前者は首都防衛を、後者はイタリア都市国家やオスマン朝との経済的関係を重視し、必ずしも首都防衛に固執しなかった。しかし、コンスタンティノーブルへの脅威が差し迫ると、アルホンたちは故国と自らの利権の間で苦悩していたことも指摘している (Harris 2012: 127-135)。

近しい知識人達が、陥落以前から思い描いてきた正教のゲノス概念は、オスマン統治下で継続していったのである。

ギボン以来、15世紀のビザンツ国家は、「衰退」と「滅亡」の文脈において語られてきた。本書の意義は、1453年5月29日のコンスタンティノープル陥落は、「衰退」の末の「滅亡」ではなく、領域国家から都市国家への脱皮の最中に、オスマン朝によってその命脈を断ち切られたという新しい視座を提示したことであろう。都市国家化したビザンツ国家が、それに対応するかのよう政治体制、官制、イデオロギー面において変化を遂げていた。かつて井上浩一氏がビザンツを「脱皮をくりかえす帝国」と表現したことが思い起こされるように（井上1990: 244-246）、最末期のビザンツ国家は、近世に向けて様々な可能性を胚胎していたのである。

しかし、キウソプルの議論には疑問点が残る箇所がある。分析対象をコンスタンティノープルに絞り、他の地域を捨象しまった点である。首都だけでなく、セサロニキ（1430年に降伏）やミストラス（1460年に降伏）は、辛うじてビザンツ領に留まっていた。キウソプルが主張するコンスタンティノープルの都市国家化は、セサロニキでも進行していたのではないか。キウソプル自身もコンスタンティノープルだけでなく、セサロニキの「ポリティア」にも言及しているからである。キウソプルの本著作が上梓されてから2年後に、ネジポールはオスマン朝の侵攻に対し、コンスタンティノープル、セサロニキ、モレアスの有力者層、貧困層がどのような態度を示したのか分析している。史料や紙幅の制約もあるかもしれないが、ビザンツ領に残留していた地域を比較対象とすれば、コンスタンティノープルの位置づけがより鮮明になり、自説を補強できたのではないかと思われる。

評者が関心を寄せる外交使節について言及しておきたい。本書は外交使節についての議論が主ではないものの、キウソプルは先行研究を踏まえて、議論を構築しており評者は内容について同意できる。しかし、些細ではあるが、指摘しておきたいことがある。パレオロゴス朝初期には、宮廷官僚だけでなく、聖職者も使節に従事するのが常であった。最末期には教会合同にまつわる公会議出席を除いて、聖職者の使節は減少傾向にあった（Mergiali-Sahas 2001: 588-604）。本書はアルホンに焦点を当てているので、聖職者の使節は捨象されている。この点を強調すれば、著者は外政面における世俗化の傍証とできたのではないだろうか。

最後に著者の最新研究を紹介して、本評を終えたい。キウソプルは皇帝の「管財人」化がアンドロニコス2世（在位：1282-1328）の時代に始まっていたと論じている。13世紀末から14世紀のはじめは、小アジアにおける反乱、アルセニオス派の活動、カタルーニャ人傭兵の軍事活動等により、皇帝政府は困難な状況に直面した。対策を打とうにも財政は逼迫していた。そこで皇帝政府は貿易活動によって富裕化したメシを政権に包摂し、土地貴族に対抗しようと試みた。メシの側も官職を購入することで宮廷入りし、社会的地位を向上させた。15世紀にその存在が示唆され、メシが主たる構成員であるポリティアについてもパレオロゴス朝初期にもその存在が認められるという。アンドロニコス2世はメシから構成される首都のポリティアに金銭的貢献を求め、メシたちは政治的意思決定への関与を要求した。そして、皇帝が諸勢力間の利害を調整する

メサゾン（例えばセオドロス・メトヒティス）を重視し、彼に依存していった。このことは皇帝の「管財人」化への端緒となった (Kiousopoulou 2021: 164-168)。

本書は社会、経済、政治、思想と多分野にわたって検討がなされている。それを評することは評者の能力を超えてしまい、雑駁な書評となったかもしれない。読者諸氏にご海恕を乞いたい。キウソプル自身は本書について、官制、官僚、外交使節の研究が目的ではないと断りを入れているが、膨大な史料を利用し、アルホンや外交使節のリストを準備して議論を構築している。ビザンツ最末期史を研究する上で、本書が不可欠な文献であることは言を俟たないであろう。

参考文献

[欧語文献]

- Harris, J. (2012) “Constantinople as City-State, c.1360-1453”, in Harris, J., C. Holmes, E. Russell (eds.), *Byzantines, Latins and Turks in the Eastern Mediterranean World after 1150*, Oxford: Oxford University Press: 118-140.
- Kiousopoulou, T. (2011) *Emperor or manager: Power and Political Ideology in Byzantium before 1453*, translated by Paul Magdalino, Geneva: la pomme d’or.
- Kiousopoulou, T. (2021) “Une approche du pouvoir impérial au début du XIVe siècle”, *Travaux et mémoires* 25/1: *Le monde byzantin du XIIIe au XVe siècle: anciennes ou nouvelles formes d’impérialité*, Paris: Association des amis du Centre d’histoire et civilisation de Byzance: 159-168.
- Necipoglu, N. (2009) *Byzantium between the Ottomans and the Latins: Politics and Society in the Late Empire*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Oikonomides, N. (1979) *Hommes d’affaires grecs et latins à Constantinople, XIIIe-XVe siècles*, Montréal: Institut d’études médiévales Albert-le-Grand.
- Mergiali-Sahas, S. (2001) “A Byzantine ambassador to the West and his office during the fourteenth and fifteenth centuries: A profile”, *Byzantinische Zeitschrift* 94: 588-604.

[邦語文献]

- 井上浩一 (1990) 『生き残った帝国ビザンティン』 講談社
- スフランツィス, ゲオルギオス (平野智洋訳) (2012) 「史料翻訳・註解 ゲオルギオス・スフランツィス著「回顧録 (小年代記)」(2-2): 翻訳, 註釈と解説, 第 21 章より第 28 章まで (1430-1448) まで」『東海史学』46: 47-62.
- ハリス, ジョナサン (井上浩一訳) (2013) 『ビザンツ帝国の最期』 白水社